

令和 4 年 6 月 12 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00705

研究課題名(和文) 言語習得の観点から見た表現の借用と適切な引用

研究課題名(英文) Language Borrowing and Citation Practice from the Perspective of Second Language Acquisition

研究代表者

菅谷 奈津恵 (Sugaya, Natsue)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・教授

研究者番号：90434456

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語学習者、日本語母語話者の引用の習得過程を明らかにするために、参考資料をもとにして書かれた説明文やブックレポート等のテキスト分析を行った。引用規則に関する知識について検討するために、質問紙調査、インタビュー調査も実施した。調査結果で見られた読解や文章産出時のつまづきを踏まえて、読解・作文授業を実践し、適切な引用につながるノート指導の手引きやライティング課題の開発に取り組んだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語学習者、日本語母語話者の双方にとって引用は非常に困難なものであり、引用規則を知っていても、文章産出時にはしばしば不適切な表記となることが確認された。教師からのコメントや受講生同士のピア・フィードバックにより、出典表記や引用表現の適切性は徐々に改善されるが、引用文献の選択や読み誤りによると思われる問題は残り、学習者が適切に引用ができるようになるには、読解の支援を十分に行うことが重要だと考えられた。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the citation practice by learners of Japanese and native speakers of Japanese through textual analysis of various reading-writing assignments, such as argumentative essay and book reports. We also conducted questionnaires and interviews with both international and Japanese students to examine their knowledge of the source use. Based on the students' difficulties found in the study, we implemented reading/writing instruction and developed teaching materials for note-taking and source use.

研究分野：日本語教育

キーワード：アカデミック・ライティング ノートテイキング 読解力 引用表現 言い換え

## 1. 研究開始当初の背景

学生のレポート・論文における盗用は、大学教育の信頼性に関わり、研究倫理の基盤となる深刻な問題である。しかし、盗用の原因は倫理観の欠如とは限らず、特に、第二言語の場合には言語的な難しさが大きく関わっていることが指摘されている(吉村 2013)

こうした観点から見ると、現在行われている日本語の引用指導には、読解の支援や学習者の習得メカニズムへの理解が不十分な可能性がある。適切に引用を行うには、参考資料の内容を踏まえて、自身の理解表象を構築する必要がある。だが、読解でつまづいた場合には、自分の言葉での言い換えができないため、原文の表現に頼らざるをえない。自然な言語産出にはその文脈で定型的に使用される表現を記憶することも重要であり、どの表現をどの程度という問題はあるが、表現の借用は言語習得過程の一部とも言える。さらに、このように引用が非常に困難で習得に時間を要するものであるという認識も、教員の側に不足しているように思われる。文法習得研究では、教室で教えた規則(宣言的知識)がすぐに運用(手続き的知識)につながるわけではなく、学習者の習得には普遍的な過程があることが知られている。引用についても同様の過程が想定されるが、どう教えればよいかを検討するためには、まず、いかに習得されるかを明らかにする必要がある。

## 2. 研究の目的

- (1)日本語学習者がアカデミック・ライティングにおける引用の留意点についてどのような知識を持っているか、実際にレポートや説明文等の文章を作成する際にどのように参考資料を用いているかを検討し、引用に関する宣言的知識と手続き的知識との関係を明らかにする。
- (2)日本語母語話者の引用知識とレポートにおける引用の調査も行い、日本語学習者の特徴を明らかにする。
- (3)日本語学習者への読解・言い換え指導により、参考資料からの表現の借用と、引用文の適切さがどう変化するかを明らかにする。
- (4)上記の調査結果を踏まえ、日本語学習者が適切に参考資料を使用できるよう指導方法を試行し、教材を開発する。

## 3. 研究の方法

### (1)レポートを課す授業での調査

#### 質問紙調査

大学・大学院で開講される複数の授業において、日本語学習者、日本語母語話者を対象に質問紙調査を実施し、引用知識を含むアカデミック・ライティングの意識を尋ねた。

#### テキスト分析とインタビュー調査

の授業で提出されたレポートについて、引用に用いられた資料を収集して原文と引用文との比較を行い、表現の借用と引用の適切性を調査した。このうち同意が得られた日本語学習者、日本語母語話者を対象に、レポート作成時の困難や執筆意図等を尋ねる半構造化インタビューを行い、レポートの特徴とあわせて習得過程を詳細に検討した。

### (2)日本語学習者対象の読解授業での調査

#### 読解ノートの分析

読解授業で行った技能統合課題(読む・書く:読解ノート作成後に説明文を書く、読む・話す:

読解ノート作成後に口頭で説明する)において、日本語学習者がどのようにノートを作成したかを分析した。

#### 筆記報告・口頭報告の分析

学習者による筆記報告(説明文の作成)、口頭報告について、それぞれ原文の読解文章からどのような情報が抽出されているのか、その情報は正確かどうかといった観点で分析を行った。

の読解ノートの特徴とも合わせて検討し、読解と産出の過程でどのような困難が見られるかを検討した。

#### (3)指導方法と教材の開発

上記の調査結果にもとづき、日本語学習者が適切に参考資料を使用できるようになるための指導方法を試行し、教材を開発した。

### 4. 研究成果

#### (1)レポートを課す授業での調査

引用に関する質問紙調査を分析した結果、日本語学習者、日本語母語話者ともに、引用の不要な一般的知識と出典を記すべき情報との区別が困難なことがわかった。直接引用と間接引用の表記の違いについても理解が不十分な学生が多いことが明らかになった。また、アカデミック・ライティング能力について尋ねる質問項目では、参考文献の選択や引用に関する知識についての自己評価が、文章構成やテーマの選択等に関する自己評価に比べて低い傾向があることがわかった。

学期中に複数のレポートを課す授業で、各レポートの参考文献の選択と出典の表記がどのように変化したかを検討した結果、期末レポートでは、学期当初のレポートに比べてより信頼性の高い参考文献が選択されていることがわかった。文中の出典表記や引用表現もより適切なものへと変化したことが確認された。インタビューの回答から、こうした変化には教師や他の受講生からのフィードバックが影響したことが示唆された。

だが、期末レポートにおいても、依然として使用される引用表現は限定されており、参考文献の選択や引用符の使用に不適切なものが残ることがわかった。問題点のいくつかはインタビュー中に学習者が自ら指摘できていたことから、引用の規則を知識としては持っていても運用の際にその知識が十分に反映されなかったことが考えられる。読解でのつまずきについては学習者自身が気づいていなかったり、ピア・フィードバックが行われてなかったりする場合も多く、教師からの支援が必要であると考えられる。日本語母語話者、日本語学習者の双方にとって引用は非常に困難なものであり、その習得には根気強い指導が必要であると言える。

#### (2)日本語学習者対象の読解授業での調査

読解授業で留学生が作成した読解ノートとそのノートに基づく説明文(筆記再生)と口頭での報告(口頭再生)を分析した結果、読解ノートは文章の要点理解の促進と外部記憶として機能し、自分の言葉での言い換えを促すのに有効であることが確認された。だが、読解の時点、及び読解ノートから筆記再生や口頭再生をする時点で、問題が生じる場合があることが明らかになった。ノートに記録されていないが筆記・口頭再生された情報も一定程度あるため、読解ノートだけでは、どのような表象が構築されていたかを把握することはできない。今後は、再生課題後のインタビューを行うといった方法により、内容理解を検証する必要がある。

#### (3)指導方法と教材の開発

上述の分析結果を踏まえて、留学生向けの読解授業及びライティング授業での指導実践を行った。授業では引用の機能や表記方法の知識不足、引用文献の選択におけるつまずきに対応する

ため、その留意点を解説した教材と練習用の課題を作成した。文献選択の留意点については初年次生向けのレポート教材である『東北大学レポート指南書』の改訂版にも盛り込んだ。また、読解ノート作成のコツを解説した教材を作成し、ウェブサイトにて公開した。その他の開発教材についても、内容と書式を整えた上で順次公開する予定である。

<引用文献>

吉村富美子(2013)『英文ライティングと引用の作法：盗用と言われないための英文指導』研究社.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 菅谷奈津恵	4. 巻 7
2. 論文標題 大学院科目におけるライティング指導の試み：ブックレポートの引用を中心	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	6. 最初と最後の頁 299 - 308
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 楊 明翰、菅谷 奈津恵	4. 巻 26(1)
2. 論文標題 台湾人学習者は意見文に資料をどう用いたか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語教育方法研究会誌	6. 最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19022/jlem.26.1_4	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菅谷奈津恵	4. 巻 5
2. 論文標題 全学教育科目のレポートにおける引用：日本人学生と留学生の事例から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	6. 最初と最後の頁 153-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石井怜子・菅谷奈津恵
2. 発表標題 統合タスクにおける読解ノートと口頭報告の関係：学部留学生2名の事例から
3. 学会等名 第31回第二言語習得研究会（JASLA）全国大会、ポスター発表
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井 怜子・菅谷奈津恵
2. 発表標題 留学生の読解ノート作成スキルと内容説明文産出の関係
3. 学会等名 第51回日本語教育方法研究会ポスター発表
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 串本剛・佐藤智子・菅谷奈津恵・中川学・東北大学附属図書館学習支援実施部会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東北大学学務審議会/東北大学高度教養教育・学生支援機構	5. 総ページ数 36
3. 書名 東北大学レポート指南書 第3版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	石井 怜子  (Ishii Reiko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------